

原子力規制委発足10年

教訓は生きたか

福島事故調委員長に聞く

▲▼下▼

「国会事故調査委員会は、東京電力福島第1原発事故の背景に『規制の虜』があると指摘しました。

「規制する側(旧原子力安全・保安院)が規制される側(東電)に取り込まれて機能しなくなつた。当時は東電の方が技術で勝り、事業者主導でルールがつくられた。保安院は原発推進の経済産業省内にあり、規制を強く言うと圧力がかかる状況だつた。新たな規制を導入しようとする対する訴訟リスクもあつた」

「東電の虜になつた保安院は自然災害の危険性を認識していたが、限られた人間が都合よく解釈して対応を先送りした。国民の安全を守るために規制は、東電の利益を守る

国会事故調 黒川 清氏(86)



くろかわ・きよし 1936年東京都生まれ。東大医学部卒。米カリフォルニア大ロサンゼルス校と東大医学部の内科教授、東海大医学部長などを歴任。2003~06年に日本学術会議会長。11年12月~12年7月に東電福島第1原発事故の国会事故調査委員会委員長。

「縦社会」思考変化なく 提言実施へ国会は議論を

ものになつていた」
「背景には何があつたので
しょうか。

「米国で長く暮らした私に
とって、規制の虜は日本社会
への問題提起だった。日本は
同じ企業・組織でキャリアを
積み上げることが多い『縦社
会』で、『横』に動きにくい。
エリートは前例を踏襲し、組
織の利益を守ることに必死

だ。異なる意見を排除しやす
く、異論を言うと干される。
同質性の高い組織は間違つた
方向に進みやすく、取り返し
のつかない間違いをする。そ

れが福島事故だ。日本は規制
は一生懸命やつている。ただ、
当局は変わつたのでしょう

か。『縦社会』の思考はそう
から10年がたちました。規制
は一生懸命やつしている。ただ、
当局は変わつたのでしょう

けで議論していたと聞いてい
る。違う立場や考えの人を入
れずに勝手に決めていたとい
うことだろう。結局、福島事
故の構造と変わつていなか
やないか」

「(この連載は東京支社・山
田悠、遠藤寛幸が担当しまし
た)